

第3章

日本青年外国派遣

テーマ I : 再生可能エネルギー モロッコ派遣

行 動 日 程

訪 問 先 等 一 覧

参加青年代表報告

ディスカッション成果

行動日程

2024年度 テーマⅠ：再生可能エネルギー モロッコ派遣

	月日	時間	活動内容	滞在都市
1	9月21日 (土)	9:05 16:50 21:00 22:55 0:00	羽田発 (AF163) パリ着 パリ発 (AF1358) ラバト着 ホテルチェックイン	東京 パリ ↓ ラバト
2	9月22日 (日)	9:00 10:15-13:30 13:30-15:00 15:30-19:30 20:00	オリエンテーション ラバト市内視察 (シェラ、ハッサンの塔、モハメッド5世廟、ウダイヤのカスバ) 昼食 ラバト市内視察 (市場、スーパーマーケット) ホテル帰着	
3	9月23日 (月)	14:10 14:30-14:45 14:45-17:00 18:00	ホテル発 倉光秀彰駐モロッコ日本国大使表敬訪問 在モロッコ日本国大使館主催レセプション ホテル帰着	
4	9月24日 (火)	9:30 9:50-11:00 12:00-12:45 13:20-15:00 15:00-17:00 18:00	ホテル発 高等教育・科学研究・イノベーション省訪問 昼食 エネルギー移行・持続可能開発省訪問 モロッコ持続可能エネルギー庁 (MASEN) 訪問 ホテル帰着	
5	9月25日 (水)	7:30 11:00 11:30-12:00 12:00-13:30 13:30-14:30 14:30-15:30 15:30-16:30 17:30-18:30 18:30-20:00 20:00-21:00	ホテル発 モハメッド6世工科大学(UM6P)到着 オリエンテーション UM6P博士課程の学生とのポスターセッション UM6P関係者及び学生との昼食会 UM6P持続可能なエネルギー技術のための研究室訪問 グリーンエナジーパーク見学 UM6Pホスピタリティ・ビジネス・マネジメント学部棟視察 UM6P関係者及び学生との夕食会 UM6P関係者及び学生との交流会 (ボーリング)	↓ ベンゲリル
6	9月26日 (木)	8:30 9:30-11:00 11:30-12:30 12:30-14:00 14:00-16:30 17:00	移動 (ベンゲリル→マラケシュ) モハメッド6世水文明博物館訪問 マラケシュ市内視察 (クトゥビアの塔) 昼食 マラケシュ旧市街視察 (ジャマ・エル・フナ広場、スーク) ホテルチェックイン	↓ マラケシュ
7	9月27日 (金)	8:30 12:30 12:30-13:30 13:45-15:30 16:00-17:45 18:00	ホテル発 アガディール・イブン・ゾホル大学 (UIZ) 訪問 UIZオリエンテーション (管理棟) UIZ関係者との昼食会 UIZスース・マッサ・イノベーション・シティ (CISM) 訪問 ・施設概要説明 ・施設見学 ホームステイ家族と合流 ホームステイ	↓ アガディール ↓

	月日	時間	活動内容	滞在都市
8	9月28日 (土)	11:00 11:30-16:30 19:30-21:30 22:00	UIZ集合 アガディール市内視察（市場、アガディール・カスバ遺跡、アルガン博物館） ホテルチェックイン ホストファミリー歓送会 ホテル帰着	
9	9月29日 (日)	6:20 9:50 10:50 15:55 19:55 22:10	ホテル発 アガディール発（AT430） カサブランカ着 カサブランカ発（AF1597） パリ着 パリ発（AF274）	カサブランカ ↓ パリ ↓
10	9月30日 (月)	18:50	羽田着	東京

訪問先等一覧

2024年度 テーマ I : 再生可能エネルギー モロッコ派遣

9月22日

プログラム	ラバト市内視察
都 市	ラバト
青年による報告	ラバトはモロッコの首都であり、多くの省庁が集まる政治の中心都市である。また都市そのものがユネスコの文化遺産に登録されている。派遣団はシェラ、モハメッド5世廟、ハッサンの塔、ウダイヤのカスバを訪問した。古代ローマ時代とマリーン朝(12世紀末から15世紀末にあったイスラーム国家)の遺跡であるシェラでは自然やイスラム教の雰囲気を感じて過ごした。次に団員はモハメッド5世とその息子たちが祀られているモハメッド5世廟を訪れ、伝統的な大理石の装飾や制服を着た衛兵などを見学した。また、ここでは12世紀末に建築が開始され、未だ完成していないハッサン塔も見学し、モロッコの歴史を学んだ。ウダイヤのカスバは12世紀に建造された城壁を利用して17世紀に造られた城塞地区である。

9月23日

訪問先	在モロッコ日本国大使館
都 市	ラバト
面 会 者	倉光 秀彰 特命全権大使 吉田 拡生 三等書記官 佐藤 翔 専門調査員
青年による報告	在モロッコ日本国大使館にて倉光秀彰大使を表敬訪問した。倉光大使からはモロッコが2030年に全発電容量に占める再生可能エネルギーの割合を52%に増やす目標を掲げている背景について、モロッコ政府とは異なる視点からお話を伺った。モロッコでは欧州連合との緊密な関係や外交上の必要性から再生可能エネルギー事業への転換が急速に進められている。しかしこれまでの産業構造を大きく変化させるため、様々な課題があることを学んだ。 その後、モロッコ青年日本招へい団やモロッコ政府関係者等とのレセプションが開催され、団員は日本文化を紹介するためにソーラン節と近年流行しているJ-POPの踊りを披露した。

9月24日

訪問先	高等教育・科学研究・イノベーション省訪問
都 市	ラバト
面 会 者	Sanaa ZEMBAKH 協力パートナーシップ指導局長 Oulaya CHOUAY 二国間・多国間協力部長 Wiam CHAKIB アメリカ・アジア諸国協力係長
青年による報告	高等教育・科学研究・イノベーション省はモロッコにおける大学の教育システムや科学技術に関する省庁である。今回の訪問で、団員はモロッコ王国の高等教育の現状についての説明を受けた。モロッコは12の公立大学を持ち、博士課程の学生の教育に特に力を入れている。博士課程の学生はモロッコの次世代を導いていく人材であり、また留学や新たな言語の取得も奨励している。

訪問先	エネルギー移行・持続可能開発省
都 市	ラバト
面 会 者	Badiaa GUEROUI 戦略・計画・監視・協力担当局長 Kouider EL ABBAOUI 地質遺産・博物館局長 等
青年による報告	エネルギー移行・持続可能開発省はエネルギー、鉱業、地質学の分野の政策を策定し、実行する省庁である。今回の訪問では省内にある恐竜の化石、隕石、鉱物などに関する展示室を見学した後に、再生可能エネルギーに関する戦略について説明を受けた。モロッコは特に、2035年までの持続可能な開発戦略の刷新、2050年までに低炭素社会の実現を目指し、低炭素戦略、循環型経済、再生可能エネルギー、鉱業、水素エネルギーに重点を置き、具体的なロードマップを策定していた。発表終了後は派遣団員の質問に対してそれぞれのプロジェクトの担当者から回答していただき、専門的な知識を得ることができた。

訪問先	モロッコ持続可能エネルギー庁 (MASEN)
都 市	ラバト
面 会 者	Tarik BOURQOUQOU 国際協力・開発担当マネージャー 等
青年による報告	モロッコ持続可能エネルギー庁(MASEN)は政府出資の民間企業であり、水力、風力、太陽光発電等の再生可能エネルギープロジェクトを主導している。今回の訪問ではモロッコにおける再生可能エネルギープロジェクトや国家戦略である2030年に、全発電容量に占める再生可能エネルギーの割合を52%に増やす取組について説明を受けた。モロッコの再生可能エネルギーのポテンシャルや欧州連合をはじめとした諸外国とのプロジェクト等、具体的な事例を学ぶことができた。

9月25日

プログラム	モハメッド6世工科大学(UM6P)
都 市	ベンゲリル
面 会 者	Youssef Samih 主任研究員 田 淵 徹 主席研究員 Katif SOUKAINA プロジェクト・マネージャー 等
青年による 報 告	モハメッド6世工科大学(UM6P)はベンゲリルにあるモロッコのトップ大学である。5,684人の学生が在籍し、その内、女性が59%、男性が41%である。今回の訪問では太陽光パネルの実験施設であるグリーンエナジーパーク、持続可能なエネルギー技術のための無機材料研究室等を訪問し、学生を補助する環境を視察した。また、博士課程の学生によるポスターセッションで再生可能エネルギーに対する学生の熱意を実際に体感した。一方で、ホスピタリティ・ビジネス・マネジメント学部や学内のポーリング場などを訪れ、学生の多様なニーズに応える大学の在り方も知ることができた。

9月26日

訪問先	モハメッド6世水文明博物館
都 市	マラケシュ
青年による 報 告	モハメッド6世水文明博物館は、モロッコにおける水管理や水を使った技術、水にまつわる伝統や文化等、多様な側面から水について学ぶことができる施設である。モロッコの地勢、水資源管理の伝統的手法や最新の技術、水に関連する儀式等、学芸員より説明を受けた。日本ではあまり直面することはないが、水資源に限られるモロッコだからこそ存在する文化的行事や、水を確保するために発達した様々な技術などを知る機会となった。

プログラム	マラケシュ市内視察
都 市	マラケシュ
青年による 報 告	モロッコ西部にある経済の中心都市であるマラケシュでは、クトゥビアの塔、ジャマ・エル・フナ広場を訪問した。マラケシュのシンボルであるクトゥビアの塔では、イスラム教の礼拝の様子を見学することができた。ジャマ・エル・フナ広場は賑わう前の時間に訪問したため観光客ばかりであったが、日が沈むと屋台が立ち並んで現地の人たちも集まってくるという。広場の横にあるスーク(市場)では、実際に買い物をして現地の人と交流し、モロッコでの生活や文化を体感する時間となった。

9月27日

訪問先	アガディール・イブン・ゾホル大学 (UIZ)
都 市	アガディール
面 会 者	Abdelaziz BENDOU 学長 等
青年による 報 告	アガディール・イブン・ゾホル大学 (UIZ)はアガディールにある公立大学である。学内にはスース・マッサ・イノベーション・シティ(CISM)という起業支援施設がある。今回の訪問では大学全体のオリエンテーションと昼食の後、CISMを実際に訪れ、CISMの取組について説明を受けた。CISMは、起業に向けてビジネスアイデアを実現することからベンチャーキャピタルとの繋がりを確立するまでの約3年間を支援する施設である。取組の一つである「技術・研究開発プラットフォーム」という研究施設を見学し、生物分解性ポリマー等のサステナビリティに貢献する最新技術を研究する研究員や学生から説明を受けた。

9月28日

プログラム	アガディール市内視察
都 市	アガディール
青年による 報 告	アガディールはモロッコ南西部にある港湾都市である。そこで派遣団員はホストファミリーと共に市場スーク・エル・ハド、アガディール・カスバ遺跡、アルガン博物館を訪問した。モロッコ最大の市場であるスーク・エル・ハドでは、現地の生活に触れるとともに、価格交渉も体験した。その後、街を見下ろす丘の上にあるアガディール・カスバ遺跡を訪れた。ガイドの説明によると、16世紀に造られた要塞であったが、役割を終えた後は1960年の地震で崩壊するまで居住地として機能したという説明を受けるとともに、災害の悲惨さを垣間見た。最後に、モロッコの固有種であるアルガンの木について学ぶアルガン博物館を訪れ、団員はアルガンの実を昔ながらの方法で潰す体験をした。

参加青年代表報告

2024年度 テーマⅠ：水と防災 モロッコ派遣

ありのままの自分と向き合う

小泉 雅己

学生時代の‘集大成’と位置付けた本事業

私が環境問題に深い関心を抱ききっかけとなったのは、中学の修学旅行で熊本県水俣市を訪れたことである。水俣病患者の方々から直接お話を伺い、その被害が身体的な苦痛にとどまらず、半世紀にわたり人間関係や地域社会に多大な悪影響を及ぼしていたという現実には大きな衝撃を受けた。以来、環境問題の根本的な解決を追求すべく、国内で唯一「環境法」を専門に学べる大学に進学することを決意した。

大学では国際法を中心に学び、国家間の環境問題における法的な訴求可能性や、世界基準での規制強化の必要性、さらには現行の環境条約の批准国数を増やすための具体的な施策について研究を重ねた。しかし、理論や法制度としての知識が現実社会の環境意識とは乖離していることに気付くと、次第にその学びに対する意欲を失いかけていた。こうした葛藤の中で、単に机上での議論にとどまらず、国際的な場で異なるバックグラウンドを持つ人々と対話を交わし、自らの知見や価値観を共有する場が必要だと強く感じるようになった。

本事業への応募を決意したのは、この思いを実現するためであった。派遣国での活動や国際青年交流会議を通じ、これまで培ってきた知識と経験をいかし、学生生活の集大成として真摯に取り組みたいと思ったからだ。

事前研修と目標

蝉の声が響く7月上旬、選考を通過した他の参加青年と初めて顔を合わせた。これまで15年間野球に打ち込み、同質性の高い組織で過ごしてきた私にとって、多様な背景を持つ仲間と交流を深めることは、新鮮で充実した経験となった。中でも本派遣団の意思決定の速さには驚かされた。講師からは慎重であるべきとの指摘もあったが、私たちの決定は異例なほど迅速であった。その理由として振り返ると、二つの要因が挙げられる。第一に、各団員が自らの役割を的確に把握し、それに全力で臨んだことが、意思決定の効率化につながった。第二に、団員それぞれが異なるリーダーシップ論を持ちながらも、それらがうまく調和していたことである。これは、事前研修で学んだ「Servant Leadership」を基盤とし、各自が自身の強みを最大限に発揮できる環境が整っていたからだと考える。この経験を通じて、組織の効率を最大化するリーダーシップの形は一つ

ではなく、多様であることを再認識した。

本研修で掲げた目標について述べると、派遣団としては「共に灯せ、私たちの未来 -Cast Light on Our Future Together-」、個人としては「ありのままの自分と向き合い、視野を広げる」という二つを定めた。前者の目標には、再生可能エネルギー（以下、再エネ）がもたらす「光」と、事業を通じて未来に向けて輝くグローバルリーダーとしての姿を重ね合わせる意図が込められている。後者の目標には、就職活動を終えた直後の私が、型にはまった自己分析を超えて、本当の「自分」を見つめ直し、視野を広げる機会にしたいという思いが込められている。

再エネに関する施設訪問と講話

1. 持続可能エネルギー庁 (MASEN)

MASENは、モロッコにおける再エネの開発を主導する政府出資の民間企業であり、主に太陽光発電を中心に多様なエネルギー源の普及促進を図っている。現在、4,600メガワット以上の再エネプロジェクトが稼働しており、さらに4,500メガワットが開発段階にある。代表的なプロジェクトには、3,100メガワットの太陽熱・太陽光発電プロジェクト「NOOR」と、1,400メガワットの風力発電プロジェクト「NASSIM」があり、これらによりエネルギー自給率の向上と環境保護の実現を目指している。また、財政支援を確保するため、多様な資金調達手段を導入し、国内外からの投資を積極的に促進している。MASENは、再エネの普及を通じて、脱炭素社会の実現とエネルギー供給におけるモロッコの独立を目指す重要な役割を果たしている。

訪問中の質疑応答では、地震や台風などの自然災害への対応について質問し、主に砂嵐や干ばつが大きな課題



MASENにて自然災害について質問する

であることを知った。砂嵐は太陽光パネルの表面を覆い、発電効率を低下させるため、定期的なメンテナンスが必要となり、コストが増加する可能性がある。また、水資源の不足は、冷却システムなど太陽光発電の運営に影響を与え、気温上昇が発電効率に及ぼす影響も懸念されている。

2. 高等教育・科学研究・イノベーション省

高等教育・科学研究・イノベーション省は、持続可能なエネルギー分野における人材育成と研究の推進を担っている。同省はエネルギー分野の教育機関や研究センターと連携し、技術革新や専門教育プログラムの充実に努めている。再エネに関する研究開発のためのインフラ整備や、学生や若手研究者への奨学金制度の提供により、エネルギー分野でのキャリアパスの確立を支援している。このように、国内外のエネルギー需要に応えるための高度な技術者や研究者を育成に注力している。

3. グリーンエナジーパーク

ベンゲリルに位置するグリーンエナジーパークは、モロッコの持続可能なエネルギー技術開発の拠点である。この施設には、ソーラーパネルの実験設置や水素燃料技術の研究など、最先端のエネルギー技術に関する試験を行うための設備が備えられている。施設は、研究機関や民間企業と連携し、エネルギー技術の実証実験や効率化に向けたプロジェクトを推進している。この拠点を通じて、国内外のエネルギー課題に対応する技術革新を促進し、モロッコが再エネ技術分野でのリーダーとして国際的に認知されることを目指している。

モロッコの方々との関わり

モロッコでは、議論したPh.D.の学生、ホストマザー、そして帰り際には「兄貴」と呼んでくれるほど親しくなった現地コーディネーターのRachidさん等多くの方々とお会った。中でも印象的であったのは、マラケシュの自由時間に遭遇した革製品を販売していた30代男性である。彼は皮をなめす工程を見せるために5分先の所へ案内するといったにも関わらず、30分近く掛かり、その後の集合時間に遅れ

てしまった。しかし、今では良い思い出である。閑話休題。ホストファミリーと過ごした時間は本当に有意義な時間であった。特にMoroccan teaを淹れる体験では、30センチメートル以上高くから注ぐようにと指導された(高く注ぐことで泡が立ち、香りが引き立つためであるということ)ことやパレスチナ問題、地震に対する防災知識(モロッコでは2023年にマグニチュード6.8の地震発生)について語り合い、深い学びと共感を得ることができた。モロッコの人々の温かさや独自の文化を肌で感じることで、非常に充実した経験となった。

本事業での経験をいかして

私は春から不動産開発を行う企業にて勤務する予定である。一見すると、不動産業界は環境問題や再エネと直接の関わりが少ないように思えるかもしれない。しかし、近年国内では、建物の環境・社会への配慮を示す認証制度の整備や、「RE100イニシアチブ」に基づき保有する不動産の電力を100パーセント再エネに切り替える取組などが進められ、業界全体で環境意識が高まっている。このような動向の中で、本事業で培ったリーダーシップを発揮し、業界に貢献したいと考えている。

本事業を通じて、私は再エネに関する知見を深めると同時に、異文化との交流を通じて多くの学びを得ることができた。特に、モロッコでの施設訪問や現地の方々との交流を通じて、エネルギー問題が単なる技術的な課題にとどまらず、社会・経済・環境と密接に関連する複雑なテーマであることを改めて実感した。また、現地のPh.D.の学生やホストファミリーとの対話を通して、環境問題に対する姿勢や価値観が多様であることを理解し、視野が広がる貴重な機会となった。理論として学んだ知識を実地で活用し、他国の人々と協力して問題解決に取り組む意義を再確認した今、私はこの経験を糧に、環境問題解決に向けた行動意欲が高まっている。本事業で得た全ての学びを糧とし、共に持続可能な未来を築く一助となれるよう、今後も邁進していきたい。



ホストファミリーとのお別れ前の朝食写真



ディスカッションを行った仲間と発表後の様子

モロッコを五感で感じた1週間

高久 巧成

はじめに

私が今回、国際社会青年育成事業に参加しようと思ったのは、2週間という長期休みを取れる最後のチャンスだと思ったからだ。今回、社会人の参加者もいたが、私が就職する会社では、有給休暇が取れたとしても、よほどの理由がない限り長期の休みは見込めない。書類選考や面接があるのであれば、一度は挑戦してみようと思い、大学の外国語指導助手(ALT)とも数回にわたり英語での面接練習を行った。そのかいもあり、合格通知を受け取ったときは本当に嬉しかった。

ドキドキの研修期間

派遣メンバーの名簿を見たとき、正直驚いた。なぜなら、参加者12人中地方からの参加者は私ともう一人だけで、他のメンバーは皆東京からの参加者だったからだ。私でも知っているような大学、企業からの参加者が名を連ねており、そのニックネームに焦るとともに、「果たしてこんな人たちと一緒にやっていけるのだろうか?」と思っていた。しかし、研修当日、彼らに会ってみて感じたことは、皆親切で素晴らしい人ばかりだということだった。

また、彼らとの議論の進め方も非常に勉強になった。4日間の研修では、団体の目標や派遣活動中のユニフォーム、活動時の動き方など、決めなければならないことが山ほどあったが、全員が意見を出し合いながら決めていった。誰か一人だけが独占して発言するのではなく、その都度メンバーが意見を出し合うことで、物事がスムーズに決まっていく様子は大変印象的だった。リーダーシップについても多くを学ぶことができた。特に印象的だったのは、リーダーシップは常に一人の人が握っているのではなく、状況に応じて最適な人が交代でリーダーシップを取ることである。意見を一度まとめたあとでも、確認を怠らずに「同意は取れているよね?」「この理解で問題ないよね?」と疑問に思った人が率先して意見をだすこともまた重要なリーダーシップの一環であると学んだ。日常生活ではなかなか接することのない多様な背景を持つ人たちと過ごしたことで、学びを得ることができた。

初めてのアフリカ、モロッコ

私たちが訪れた都市は、ラバト、ベンゲリル、マラケシュ、アガディールであった。最初の4日間は首都ラバトで過ごし、その後ベンゲリル、マラケシュ、アガディールと、南に向かって移動した。

特に印象に残ったのは、ラバトでは欧米からの観光客をちらほら見かけた一方で、ベンゲリルやマラケシュではほ



ラバトのマーケット

んど見かけなかったことだ。また、アジア人も全く見かけなかった。モロッコはアジアからの直行便の数が限られているため、観光地としての認知度が低いことが理由として考えられる。経由地のパリでは多くの日本人を見かけたため、その違いが際立っていた。

モロッコは私の想像とは大きく異なり、町並みはきれいで発展していた。まさに駐モロッコ日本国大使表敬訪問時に倉光大使がおっしゃっていたように、ラバトの街並みは欧米に近い雰囲気があった。タクシーも多く、道路も舗装されていて、移動が非常にしやすかった。

固定化されたマーケット

マーケットも非常に興味深かった。ラバトとマラケシュで訪れたマーケットでは、売られているものはほぼ同じであった。服、靴、皿、オイル、絵、アクセサリーなどが主な商品で、マーケットの店舗数がどれだけあっても商品に大きなバリエーションの違いはなく、「また同じ店だな」と感じるが多かった。現地の人と上記のことに関して話すと、マーケットは昔から変わらず同じような品揃えの店が多いようだ。ラバトでは、店の種類も豊富に感じられ、価格競争が発生していて値段交渉が買い物の重要な要素となっていた。私たちも金額交渉を楽しみ、提示された金額の半額まで値切ることに成功した。例えば3,000円と提示された絵を1,500円で購入したときは、なかなかスリルを感じた。

コツは、帰るふりをするることである。帰るそぶりを見せると、売り手が「いくらだったら買うんだ?」と交渉を再開してくる。そこで少し低めの金額を提案し、その後少しずつ妥協することで、交渉が成立しやすくなった。マラケシュのマーケットでは、物乞いをする老婆が目の前に立ち塞がった場面があり、非常にいたたまれない気持ちになった。日本ではホームレスを見ることはあるが、物乞いをする人に遭遇することはなかったため、衝撃的な体験だった。また、山の麓にペットボトルのごみが散乱している光景も目にし、モロッコの負の側面を垣間見た。

面白い二つの文化

モロッコには興味深い文化がある。それはミントティーと毎食のパンだ。私たちは省庁や大学、会社を訪問するたびにミントティーでもてなされ、まさに「モロッカンティー」と呼ばれるゆえんを理解できた。日本でのお茶に相当する位置付けだと感じた。また、食事の際には必ずパンが出される。甘くないパンで、店によって形が異なる。サラダ、牛串、タジンといった料理にも必ずパンが付き、現地の人によるとサラダとも一緒に食べるのが一般的らしい。試してみたところ、サンドイッチのようで美味しかった。

壮大な社会実験

モハメッド6世工科大学を訪問した際、特筆すべき点はエネルギーの供給源だ。この大学の電力はほぼ全て再生可能エネルギーで賄われているという。キャンパスの入り口から中庭にかけて設置された約600平方メートルの太陽光発電キャノピーは、日陰を作りながらも電力を生み出している。実際、キャノピーの下を歩いていると暑さを感じなかった。このキャノピーは、太陽光発電パネルメーカーであるオニキス・ソーラーが製作した特注のガラスパネルに144個の結晶シリコンソーラーセルを搭載しており、年間135,000キロワット時の再生可能エネルギーを生み出して、約100トンの二酸化炭素排出量を削減している。広大な敷地を太陽光発電で賄うという試みは、日本でもなかなか例を見ない。

Ph.D.の学生とのポスターセッションでは、水素電池や

鉄、バッテリーなど、最先端の研究について現地の研究者から話を聞く機会があった。15個あるセッションのうち、3つしか聞けなかったが、理系出身として非常に興味深い内容ばかりだった。さらに、現地のPh.D.の学生とも交流し、大学生活や実験手法、解析手法など、様々な面で学びがあり、大変有意義な時間を過ごせた。

Ph.D. の待遇

モロッコでは、日本よりもPh.D.の学生の育成に力を入れていると感じた。理由としては、学費の無償化や学生寮の提供など、日本に比べて学生へのサポートが充実しているためだ。博士課程に在籍している友人が身近にいる私にとっても、モロッコのこの待遇は非常に魅力的に映った。実際、調べてみると、モロッコのPh.D.の学生数は日本よりも多いようだ。

また、私と似た分野で研究している人々とも出会い、非常に親近感を覚えた。彼らとの交流を通じて、私も自分の研究をもっと英語で分かりやすく、面白く伝えられるようにならなければならないと強く感じた。そうした意味でも、この交流は非常に良い刺激となった。

今後に向けて

今回の派遣では、モロッコ各地を訪問しただけでなく、スペインの方々とディスカッションする機会を得たことで、環境問題の深刻さをよりリアルに感じ、未来のために行動しなければならないと強く思うようになった。そのためには、まず多くの人に現実を知ってもらうことが必要だと感じた。

私が住む地域では、既に周知の取組が進んでいる。2022年から毎月参加している「Zero Waste Walk」という地域活動がその一例だ。この活動は、ごみゼロ運動のコミュニティであり、主催者が公園で気候変動や地球環境について話し、その後皆でゴミ拾いをし、コーヒーを飲みながら交流を深めるというものだ。来年度、別の地域に移る予定だが、そこでこのような活動を自分でも広げ、気候変動に対する認識の輪を更に広めていきたいと思っている。



事前研修成果発表のセッションの様子 (事前研修)



UM6Pでのポスターセッションの様子

ディスカッション成果

2024年度 テーマⅠ：再生可能エネルギー モロッコ派遣

全体成果

日 時	2024年9月25日(水)12:00-13:30
場 所	モハメッド6世工科大学
テ ー マ	テーマ1:特殊鋼 テーマ2:水素電池 テーマ3:貯蔵用バッテリー
参 加 者	日本青年10名 モロッコ青年16名
スケジュール	12:00 - 12:10 オリエンテーション 12:10 - 13:30 ポスターセッション

再生可能エネルギーをテーマにしたポスターセッションを通じた学び

三浦 大輝、高久 巧成、森 清忠

本ディスカッションでは、理系博士課程の学生が16枚のパネルを用意していただき、ポスターセッション形式で行われた。我々はそれぞれの発表に対して、各人が興味のある発表を聴講し、それに対して質疑応答を行う形式であった。

まず、最初に紹介されたのは「DP鋼」という特別な鉄の合金の研究だ。この鉄は、自動車の部品などで使われるもので、強さと柔らかさを両方持っていないといけない。鉄は温度が高いときと低いときで、その内部の構造が変わる。高温のときは「オーステナイト」という状態になり、低温のときは「フェライト」という状態に変わるのだ。この研究では、鉄をまず高温で熱してオーステナイトとフェライトが混ざった状態にし、その後急速に冷やすことで、鉄を強くするための「マルテンサイト」という強い構造を作り出していた。こうすることで、強さと柔らかさをうまく両立させることができる。研究者たちは、どの材料を鉄に混ぜるか、またはどの温度で処理をするかを工夫して、もっと良い鋼を作ろうとしていた。この研究から、材料の性能を良くするためには、実際に試すだけでなく、様々な方法を試しながら最適なものを見つけることが大事だということが分かった。

次に紹介されたのは、「燃料電池」に関する研究だ。燃料電池は、水素を使って電気を作る仕組みである。最近では、トヨタ自動車株式会社の「MIRAI」という車種がこの技術を使っていて、とても注目されている。この研究では、「アニオン交換膜」という特殊な膜を使う方法が紹介された。この膜は、水を分解して電気を作るのに使われるが、長い間使うためにはいくつかの問題を解決しなければならない。研究者たちは、様々な材料を使って、燃料電池をより効率的に、そして長持ちさせる方法を探していた。また、膜の中の水素がうまく反応しているかどうかを調べるために、赤外線を使って膜の状態をチェックする方法も紹介されていた。日本でも名古屋大学でこの研究が進められ、今後ますます重要になっていく分野だと感じた。

最後に紹介されたのは、「バッテリー」の研究だ。特に、新しいタイプのバッテリーに使う材料を探すために、コンピュータを使って実験なしで材料の性能を予測する方法が紹介されていた。これには「ニューラルネットワーク」というコンピュータ技術が使われ、実験をする前にどの材料が良いかを予測することができるのだ。実験を何度も繰り返さなくても、コンピュータで結果を予測できるので、時間やお金を節約できる。この「ニューラルネットワーク」という技術は、最近では人工知能(AI)としても使われており、いろいろな分野で応用されている。こうした技術が、再生可能エネルギーや環境に優しい技術の開発にも役立っているという点がとても興味深かった。



第4章

日本青年外国派遣

テーマⅡ：水と防災 ドミニカ共和国派遣

行 動 日 程

訪 問 先 等 一 覧

参加青年代表報告

ディスカッション成果

行動日程

2024年度 テーマⅡ：水と防災 ドミニカ共和国派遣

	月日	時間	活動内容	滞在都市
1	9月21日 (土)	15:50 16:00	羽田発 (UA130) ニューアーク着	東京 ニューアーク
2	9月22日 (日)	10:04 14:00 18:00 19:00	ニューアーク発 (UA2404) サントドミンゴ着 ホテル着・チェックイン オリエンテーション ホテル内で夕食	↓ サントドミンゴ
3	9月23日 (月)	9:45 10:00 12:00-14:00 19:00-20:30	ホテル発 青年大臣表敬訪問 (於：青年省) 青年大臣主催昼食会 移動、レセプション準備 在ドミニカ共和国日本国大使館主催レセプション (於：Hotel W&P)	
4	9月24日 (火)	8:00 10:00 16:00-18:00	ホテル発 バルデシアダム視察 旧市街散策及び日本人農業移住記念碑訪問	
5	9月25日 (水)	8:10 8:30-10:00 11:00-12:20 14:00 夜	ホテル発 緊急事態センター (COE) 訪問 水資源庁 (INDRHI) 訪問 サントドミンゴ自治大学 (UASD) 訪問 ディスカッション① UASD学生有志との文化交流会 ディスカッション参加青年との交流夕食	
6	9月26日 (木)	8:00 8:30-15:15 16:00-17:45	ホテル発 サントドミンゴ自治大学 (UASD) 訪問 ディスカッション② JICAドミニカ共和国事務所訪問	
7	9月27日 (金)	9:30 10:00-11:00 13:00	ホテル発 高木昌弘駐ドミニカ共和国日本国大使表敬訪問 (於：大使公邸) ホームステイマッチング ホームステイ	
8	9月28日 (土)	10:45 11:00 15:05 19:10	ホームステイ ホテルロビー集合 ホテル発 サントドミンゴ発 (UA1473) ニューアーク着	↓ ニューアーク
9	9月29日 (日)	10:20	ニューアーク発 (UA131)	↓
10	9月30日 (月)	13:35	羽田着	東京

訪問先等一覧

2024年度 テーマⅡ：水と防災 ドミニカ共和国派遣

9月23日

プログラム	青年大臣表敬訪問
都 市	サントドミンゴ
面 会 者	Carlos J. Valdez Matos 青年大臣 他
青年による報告	青年大臣に直接お会いし、今回のテーマ(水と防災)に関する説明や、青年省が行っている事業に関する内容、ドミニカ共和国の現状と今後の課題に関する説明を受けた。その後、日本代表青年が一人一人自己紹介をし、防災や土木を専門としている青年には大臣が一言感想を述べる場面も見られた。青年行政を担当する大臣ということもあり大変お若く、フランクに交流してくださった。また、折り紙のお礼状を渡した際にもよく説明を聞いてくださり、笑顔で受け取ってくれた。

プログラム	青年大臣主催昼食会
都 市	サントドミンゴ
面 会 者	Carlos J. Valdez Matos 青年大臣
青年による報告	青年大臣を初めとする青年省の職員、今年度のINDEXドミニカ共和国招へい青年団、そしてADOINDEX(昨年度以前の招へい青年)メンバーが一堂に会し、和やかな雰囲気の中で昼食を共にするという貴重な交流の場となった。 昼食後には、ドミニカ共和国の伝統的なダンスであるメレンゲのセッションが行われ、初心者も経験者も一緒に踊り、笑顔と笑い声があふれる一時となった。

プログラム	在ドミニカ共和国日本国大使館主催レセプション
都 市	サントドミンゴ
面 会 者	高木 昌弘 特命全権大使 古川 忠雄 参事官 伊藤 光 一等書記官
青年による報告	青年大臣を始めとするドミニカ共和国政府関係者やドミニカ共和国招へい青年団、ADOINDEXのメンバーなどと交流できた貴重な機会であった。特に普通の旅行ではお会いすることのできない政府関係者の方と食事をしながら英語でドミニカ共和国の良いところや課題について話せたことが印象に残っている。最後に日本青年団で初めてドミニカ共和国でよさこいを披露し、現地関係者と一緒に踊ったり楽しんだりして大変盛り上がった。

9月24日

訪問先	バルデシアダム視察	
都 市	サントドミンゴ郊外	
面 会 者	Jorge E. Mañan R. 水資源庁部長 Maritin Ramirez バルデシアダム 責任者	
青年による報告	バルデシアダムは首都のサントドミンゴから車で2時間程度、ドミニカ共和国有数のダムで、サントドミンゴで使用される電力の水力発電を担っている。現地では水資源庁の部長やバルデシアダムの責任者の方々から地域におけるダムの大切さや現在抱えている問題などの説明を受けた。その後、バルデシアダムにて水力発電が行われている施設に伺い、タービンが回り、発電されるまでの仕組みの丁寧な質問及び実演をしていただいた。	

訪問先	旧市街散策及び日本人農業移民記念碑	
都 市	サントドミンゴ(旧市街)	
面 会 者	面会者なし	
青年による報告	旧市街の散策では、コロンプスパークやサンタ・マリア・ラ・メノール大聖堂を訪問した。日本大使館の伊藤書記官も同行してくださり、興味深いエピソードを交えながらドミニカ共和国の歴史を学び、その独特の雰囲気を感じることができた。また、日本人農業移民記念碑を訪れた際には献花を行った。この記念碑は、日本とドミニカ共和国の末永い友好と親善を願って建設されたものであり、両国の歴史の長さや深さを改めて実感した。	

9月25日

訪問先	緊急事態センター (COE)	
都 市	サントドミンゴ	
面 会 者	Juan Fernandez	
青年による報告	災害発生時のCOEの対応やドミニカ共和国における災害対策の課題について1時間程度説明を受けた後、日本代表青年からの質疑応答を30分程度行った。ドミニカ共和国では災害対応に重きが置かれており、事前の防災対策は、避難訓練や危険度に応じて3つのエリアに分かれたハザードマップのみであり、今後日本を始めとする他国と連携した上で事前防災対策にも力を入れていきたいと話していたことが印象的であった。同じ島国の「防災」といっても国によって着目している部分が全く異なることは新しい発見であった。	

訪問先	水資源庁 (INDRHI)	
都 市	サントドミンゴ	
面 会 者	Olmedo Caba Romano 水資源庁長官 Ing. Jorge E. Mañan R. 水資源庁部長	
青年による報告	水資源庁長官への表敬訪問を行った後、水資源庁の施設にてドミニカ共和国における水環境やその課題についての説明を受けた。実際に手を動かすアクティビティや実演を交えた説明に加え、バルデシアダムを管理している政府機関であることからダム視察につながる話も多く、興味深く聞くことができた。	

訪問先	サントドミンゴ自治大学 (UASD)
都 市	サントドミンゴ
面 会 者	Antonio Medina Director of International Cooperations and Interenational Relations, Rocio Billini de Franco Director of Academic Exchanges
青 年 に よ る 報 告	2日間にわたって「気候変動」と「水と防災」についてUASDの学生とディスカッションする貴重な機会であった。同じ島国でも防災や気候変動の原因となる問題の着目している点に違いがあり、新たな視点を得る機会ばかりであった。ディスカッションだけでなく、よさこい披露と日本の紹介プレゼンテーションを行った。UASDの学生はドミニカ共和国の有名な踊りであるメレンゲとバチャータを教えてくれ、文化交流も積極的に行う事ができた。

9月26日

訪問先	JICAドミニカ共和国事務所
都 市	サントドミンゴ
面 会 者	坂口幸太 JICAドミニカ共和国事務所所長、他
青 年 に よ る 報 告	カリブ地域における防災の説明を受けた後、現地で活動するJICA海外協力隊の方と話す貴重な機会であった。協力隊の方が感じるドミニカ共和国の防災の課題やギャップについての具体的なお話から、短い滞在では得ることができないような新たな視点を得ることができた。また、協力隊の方のお話は日本青年団のキャリア設計にも影響を与えていたように感じる。

9月27日

プログラム	在ドミニカ共和国日本国大使表敬
都 市	サントドミンゴ
面 会 者	高木 昌弘 特命全権大使 伊藤 光 一等書記官
青 年 に よ る 報 告	大使公邸を表敬訪問し、高木大使へドミニカ共和国での活動内容を報告し、質疑応答の時間を頂いた。普段訪問することが難しい大使公邸を訪問できたことは非常に貴重な機会であった。ドミニカ共和国滞在6日目に行われたため、日本代表青年一人ずつドミニカ共和国で印象に残っていることや生じた疑問を大使に話すことができ、大使は1つずつ丁寧に答えてくださった。日本に戻ってからもドミニカ共和国とのつながりを絶やさないようにしたいと強く感じた。

参加青年代表報告

2024年度 テーマⅡ：水と防災 ドミニカ共和国派遣

こうして旅が始まった

澤本有咲

はじめに

高校時代に地元、高知県で開催された、日本青年国際交流機構第31回全国大会に参加した。これが、私の大航海時代の始まりだった。その後、本事業参加までは長い道のりだったが、私の世界を一変させる出来事だったと思いを馳せる。

深めて高め合う

私たちドミニカ共和国派遣団の小テーマ、「水と防災」に興味を持ち始めたのは、高校1年生の時に遡る。当時、青少年赤十字クラブを設立した私は、主に南海トラフ地震に向けた地域における防災活動を住民らとともにやってきた。現在は、災害救護員として災害時に向けた訓練を日々行っている。本事業においても、災害に負けない住み続けられるまちづくりについて各国の青年らと意見交換をすることで防災意識を高めていきたいと思い、参加した。

7月から始まった事前研修、オンライン研修と活動を進めていくなかで、台風やハリケーン、豪雨におけるリスク管理やインフラ、避難、復興について話し合うことが決まった。しかし、これまで日本における台風や豪雨はもちろんのこと、諸外国におけるハリケーン等について深く関わるものがなかった。そこで、災害対策について自国も含めて学び、今後の防災活動に繋げることを個人の目標として、自主研修期間中には主に会社内と家族内において防災活動を実施することとした。

現在、医療施設に勤務しており、年に数回、施設内において避難訓練が実施されている。ここでは、1階の利用者を救護担架に乗せ、2階に避難させる訓練も行っているが、実は、私が入社する10年ほど前に、隣接する川が台風の影響で氾濫したことがあるのだという。その際、利用者を2階に避難させるなどの対策をとり、事なきを得たという話を伺った。これを受けて、より災害時に向けた対策の重要性を感じ、避難訓練に励んでいる。

入社時より災害救護員としても登録されている私は、災害時に向けた救急法や無線、こころのケアなどの訓練を日々行ってきた。さらなるスキルアップを目指し、社内で行われていた研修会に積極的に参加した。そして、自主研修期間中に目標としていた2つの資格を取得することができ、自身のレベルアップにも繋がった。

次に、家族内では避難場所を市町村のホームページ等

を確認し、実際に避難経路を歩いてみることにした。普段、車で通り過ぎるだけの何気ない道路が、いざ災害時になると様々な危険が潜んでいるため、思い通りの避難が難しいことを認識した。また、在宅避難に備えて備蓄の見直しや衛生用品の購入なども注力してきた。今では、防災グッズに関する情報を定期的にSNSで送り合ったりと、本事業を通じて家族間で防災意識を高めることのできた自主研修だった。

リアルな学び

派遣国活動では、テーマに沿った施設訪問だけでなく、現地での災害を実地で学ぶこととなった。私たちが訪れた9月は、ドミニカ共和国ではハリケーンシーズンということもあり、出国前まで天候が心配だったが、そんなことが嘘のように期間中は晴天に恵まれ、順調に現地での活動が進んでいった。しかし、派遣国での滞在があと2日となった終盤に、私はドミニカ共和国の現状を目の当たりにする。

その日は、待ちに待ったホームステイ日となっており、期待に胸を膨らませていた。ホストファミリーとの顔合わせもひと通り終わり、家族との時間が始まった私たちは、市街地散策をすべく車を走らせていた。そんな矢先、集中豪雨に見舞われた。道路では、至るところで水溜りができ、車が通るたびに水が押し寄せてきた。なかには、冠水しているところもあった。また、交通渋滞の多いこの国では豪雨のたびに交通状態が悪化しているとホストマザーが嘆いており、インフラの弱さも肌で感じることもできた。

実は私自身、日本でも台風の影響を受けた経験があり、そのうちの1つは、お盆休みに実家に帰省していた時だった。地元、高知県では毎年7月から10月にかけて、台風により公共交通機関や農業用ハウスなど様々な被害を受けている。当時も、予定していたバスが台風接近の前日に運休を決めたため、帰宅困難者となった。そこで、やむなく家



ホームステイ中に体験した豪雨で冠水した道路

族の送迎で自宅まで帰宅したが、多くの人が高速道路を利用したために道路が渋滞し、予定していた時間を大幅に超えて深夜近くに到着したことがあった。水災害での被害は違えど、同じインフラ問題に悩んでいることを知り、水災害時における対策の重要性を改めて実感した。

さらに、サントドミンゴ自治大学では災害における国の問題点について伺うことができた。学生ら曰く、ハリケーンや豪雨後に溜まる水たまりによって蚊が発生し、デング熱などの感染症のリスクが上がるのだという。私自身、デング熱については名前を耳にしたことがある程度の知識しかなく、発生源についてもこれまで触れてこなかった。しかし、滞在中に出かけた郊外では、ドミニカ共和国の衛生問題について考えさせられた。

私たちは、派遣国活動3日目に予定していたバルデシアダム視察のため、郊外へ向かった。バスを走らせること1時間ほどで、コンクリートにトタン屋根といった集合住宅がある、いわゆるスラム街が見えてきた。そこでは、至るところにゴミが投棄されており、収集や分別といったことがなされていなかった。これが、学生らが問題視していた、デング熱の発生確率を高める環境なのだろう。現状を目の当たりにし、災害時における衛生環境改善に向けた対策を講じる活動を行っていきたく強く感じた。

繋がり

派遣国での学びをもとに、新たな目標を定めて国際青年交流会議に挑んだ。語学力に自信がなかった私は、派遣国期間中に現地青年らに声をかける機会を見失い後悔したことがあったが、日本文化が私の会話の助けとなった。また、ドミニカ共和国で出会った友人から「it's making me fall in love even more with Japan」といったメッセージをいただいた。語彙力の有無に関わらず、自ら彼女に話しかけたからこそ、より日本に対して関心を持ってくれたのだろう。この言葉は、帰国後研修での活動の自信に繋がった。

本事業においても重要な役割を果たす文化交流は、私にとって思い入れのある出来事の1つとなっている。特に、国際青年交流会議での日本文化紹介は、私の集大成となった。幼い頃から慣れ親しんだ高知県発祥の「よさこい鳴子踊り」を、団員とともに踊りたいという信念のもと、自主研修期間を使ってオンライン上で練習を続けてきた。出発前研修が初合わせとなったが、その後の派遣国活動にお

いても青年大臣など様々な方が集うレセプションやサントドミンゴ自治大学で披露することができた。本事業での最後の踊りとなった国際青年交流会議では、会場全体で踊り、盛り上がることができた。披露後には、多くの外国参加青年らが鳴子に興味を持って声をかけてくれ、英語での会話に苦手意識を抱いていた私にとって会話の糸口となった。よさこいの衣装でもあった着物の着付けは、本事業に参加するために習い始めたものだった。派遣国でのホームステイでは、日本の夏を感じて貰おうと浴衣と法被を着付けし、異文化交流を楽しんだ。

また、帰国後研修中のフリータイムでは、ジャマイカからの外国参加青年らと池袋や渋谷に出かけるなど、日本文化を通じて繋がることのできた研修期間だった。

新たな旅の始まり

高校生の時に本事業と出会い、夢や希望を持って本気で向き合い、成長してきた航海が幕を閉じた。しかし、これは新たな旅の始まりでもある。そして、既に新しい目標に向かって舵を切り始めた。

12月には、内閣府青年国際交流事業のひとつである「東南アジア青年の船」事業の参加青年が高知県へ来県するのだが、この事業の受け入れホストファミリーとして、先日名乗りをあげた。ドミニカ共和国で受け入れていただいた経験をいかし、今度は自らが参加青年らに高知、日本の魅力を発信できるよう、観光ガイドのボランティアを行いつつ、12月の受け入れに向けてスキルを磨いている。

また、本事業を通じて得た経験を次世代に還元すべく、事業報告会の実行委員としても活動している。実は、この報告会に参加することは昨年からの目標だった。昨年度の報告会アンケートに、「来年度は、この場所に参加青年として立つ」と宣言していた私は、夢を叶える喜びと同時に、本事業についてより多くの方に知っていただき、実際に体験していただきたいと考えている。今後は、母校や高知県青年国際交流機構を通じてさらなる次世代リーダー育成に寄与していきたい。

本業においても、災害時に必要とされる人を目指して災害救護員としても訓練に励むとともに、地域に寄り添った防災に注力していく。



ドミニカ共和国郊外での風景



派遣国活動での「よさこい鳴子踊り」披露

「みらいへのやくそく」 10年前から届いた手紙より

角田 渉

プロローグ

10月5日深夜。国際社会青年育成事業を終え、充実感と疲労とお土産と思い出であふれそうなスーツケースとともに自宅に戻ったところ、差出人不明の封筒が届いていた。不審に思いながらもその場で開封すると、差出人はなんとちょうど10年前、11歳の自分自身だった。そこには当時の自分から未来へ向けられた手紙と「みらいへのやくそく」と題した、未来への自分への約束を記した1枚の紙が入っていた。

「みらいへのやくそく: もっといいことをたくさんする。そしてありがとうといわれる。」

はじめに

およそ4,000文字にわたって私が今回の事業において感じたことを述べていく。ここで、現在の日本の若者世代、いわゆるZ世代の間に蔓延している「タイムパフォーマンス(以下タイパとする)」の考えを取り入れ、次の段落に私が感じたことを簡潔にまとめた。

今回、私たちは日本政府から将来の日本を担う人材へ成長することを期待され、内閣府主催の事業で「日本代表青年」としてドミニカ共和国へ派遣された。私は「有史以来人々の生活を向上させてきた化学製品や医薬品へのアクセスの国や民族間での不均等性をなくしていきたい」という目標を掲げ、今回の育成事業に挑戦した。東京を飛び立ち、アメリカ最大の都市ニューヨークのすぐそばのニューアークを経由して13,000km以上離れたドミニカ共和国の首都サントドミンゴに降り立ったのは、日本を出発して35時間後のことだった。そんなはるか遠くのカリブ海に浮かぶドミニカ共和国の碧い海、青い空のもと、紺碧色のスーツを着用し日の丸を付けて現地で様々な活動や東京で国際会議を行ったことは青二才の自分にとって、3代先ぐらいの子孫まで語り継がせていきたいと思えるほど誇らしく、21年の人生の中でも特に印象に残る大きな経験となった。

ここからは、カリブ海にある「ドミニカ国」と「ドミニカ共和国」は同じ国だと思い込んでいた自分が本事業を通じて学んだこと、感じたことおよび心境の変化を章ごとに分けてしっかりと綴っていく。この段落まで読んでいただいた方には稚拙な文ではあるが、しばしお付き合いいただきたい。



青い空・碧い海、そしてサントドミンゴの激しい交通渋滞

1. 「ドミニカ共和国に暮らす人々」に感化される —UASDの学生から学んだこと—

実のところ、サントドミンゴ自治大学(UASD)の学生との交流が、もっとも楽しみにしていたプログラムであると同時に、もっとも恐れていたプログラムでもあった。地球の反対側に住む同世代の若者とディスカッションできる機会なんてめったにないという前向きな気持ち、そして日に日に高まっていく自分の英語力でディスカッションできるのかという果てしない不安、この相反する2つの大きな気持ちの波を、出発前研修から三度の食事という消波ブロックで打ち消してごまかしていたが、ついにこの日がやってきてしまった。実際懸念していた通り、プログラム中、英語が分からなくて何度適当な相槌とごまかし笑いでその場をやり過ごしたのか。このセクションで何度、気持ちのベクトルが正負の方向を向いたかわからないが、その中でも揺らぎが大きかった2つを特記する。

1-1. 二通りの人生のレールの敷き方

水と防災に関するディスカッションの場において、UASDの学生は「私は～についてこう思う。なぜなら・・・である。それに対してあなたは どう思う?」といったように自分の発言の内容が正しいか、もしくは誤りであるか、ということよりも、意見やその理由をしっかりと述べ、相手の同意を取り付けることに重きをおいているという点が印象的であった。正誤云々よりも、とりあえずテーブルの上にディスカッションのための要素をたくさん並べ、そこからさらに新たな段階へテーマを深掘りしていくという、連鎖反動的なディスカッション手法に感心させられ、つい傍観者として振る舞ってしまう自分がいた。日本という、経済的に発展し、物や情報が豊富にある国で生活する私たちはどうしても受動的になりがちだ。一方、「人種のるつぼ」と呼ばれるほど多くの人種が混在し、経済発展の著しいドミニカ共和国で暮らす学生は、常に多方面にアンテナを張り積極的に情報収集をし、それをこのような場で積極的にアウトプットすることでよりそれぞれの専攻に対して学びを深めていた。もちろん肌の色や生い立ち、学んでいる分野も十人十色である。それでも彼ら全員の共通認識である「専門を活かして気候変動による災害など現在進行形でドミニカ共和国で起こっている様々な問題を解決する」という明確なビジョンに圧倒された。ここで人生をレールに例えて考えてみる。私はこれまで日本社会が形成してきた形のない虚像的な同調圧力の名のもと、ステレオタイプな人生という枠組みから外れないようにそっと人生のレールを敷いてきた。一方、ドミニカ共和国の彼らは国をよくしたいという想い、あるいは自分が心から達成したい目標に向かって積極的に人生のレールを敷いているように感じた。そのあまりに明確な差に、自分の考えやビジョンの薄さに気付かされ、あまりの虚しさにディスカッション中ずっと心の感情タンクがあふれそうだった。

1-2. 日本を代表するという重圧

今回のUASD訪問で新しい発見があった。それは近くに「ドミニカ国」があるからだとはいえ、彼らは決して自分たちの国のことを「ドミニカ」と略して呼ばず、どんなにラフな会話の場においても「ドミニカ共和国」と呼び、ドミニカ共和国人であることを誇り、主張していることであった。興味深いことに、これは他の施設訪問で出会った方やホストファミリー、さらには現地のスーパーマーケットの店員までにも共通していた。国全体にそういった文化が根付いているのかもしれない。彼らは満面の笑みで国旗や、国旗をあしらった赤白青のライン、República Dominicanaの文字が入ったメッセージカードや、手作りのお土産を私に手渡してくれた。そんな彼らの姿から、かつてイスパニョーラ島で暮らしていた先住民民族タイノ族の子孫であるというアイデンティティがひしひしと感じられ、背後のカリブ海の碧い海の反射と相まって、白飛びするほどに脳裏にくっきりと焼き付いた。それに対し、インターネット上から拾った画像や情報を集めて体裁だけ整えた、吹けば飛ぶような薄さの即興の日本紹介のプレゼンテーションや、なんとなく喜ぶだろうと思って100円ショップのインバウンド向けコーナーで買ったお土産で簡便に済まそうとしていた自分自身のあまりの浅はかさに耐えきれず、思わず団ポロシャツの日の丸の刺繍を剥がしたい衝動に駆られた。それと同時に、恥ずかしいことに自分自身もまた、日本社会に広がるタイパの魔力に憑依された一個人でしかないということに日本という蚊帳の外に飛び出してようやく気付かされた。

2. “生”のドミニカ共和国

そんなドミニカ共和国は近年、急激な成長を遂げている。近年のGDP成長率は新型コロナウイルスの影響を受けた年を除くと5～10%を維持し、首都サントドミンゴでは高層建築物の建設ラッシュが続いており、ショッピングモールや公園といった施設も軒並み新しく、まだまだ建設中の施設もたくさんあった。一方で、目抜き通りから一本裏に入ると、物乞いの子どもに「チーノ(中国人)!!」と言われたり、生まれて初めて見る野犬に恐れをいたこともあった。「ここは危なすぎて現地の人でも絶対歩かない。貴重品は一切持たずに私の後ろをついてくるように」とホストファザーに言われたときは、むしろ「生」のドミニカ共和国を味わえるチャンスだと、嬉々としてついていったものである。

これまで何度も父が「自分が育った昭和の時代の日本は、日々未来に向かって進んでいていい時代だった」とつぶやいているのを耳にしてきた。そのたびにインターネットや残業規制もない泥臭い時代のどこがいい時代なの

か、と心の中で悪態をついてきたが、今回事業を通じて、父の言葉が初めて理解できた。まさしく今のドミニカ共和国は高度経済成長期の日本を投影しているのではないだろうか。この国の原動力は何か？また、日本社会に欠けているものは何か？この解を解くことが、「日本代表」に選ばれ、これからの成熟した先進国である日本を担っていく私たちに日本政府から課された課題ではないだろうか。

3. “成熟した先進国”を担う私たち

今回の渡航は私にとって“タイパ依存症”から脱却するきっかけとなった。先人たちの努力によって物質的な豊かさに恵まれた時代、そして同調圧力が根底を支配する社会、この2つがちょうど重なった時代を生きる現代の若者の間にタイパの考え方が広がったのも頷ける。21世紀の日本社会が人間の泥臭さく、「生」が感じられるものを極限まで削り、無駄をなくし、AIを駆使しながら無機理的な合理化を図ることを推進してきたという背景も関係していると考ええる。

実際、はじめの一段落で私の感じたことを生成AIの力も借りてタイパを重視する読者のためにまとめてみたが、結局のところこの一段落だけでは無機理的な文となってしまう、学んだことを何も伝えられなかった。タイパを高めるために葬られた部分。それこそが人の“間”に生きる私たちにとって失われつつあるものであり、不可欠なものではないだろうか。そして、ドミニカ共和国では泥臭い温かみが残るが日本では絶滅の危機に瀕しているのではないか、ということを実地ドミンゴからニューアークに向かう、ユナイテッド航空1473便の窓の外に広がる壮大な紺碧色の大西洋に沈む夕焼けを見ながら考えさせられたのであった。

エピローグ 10年前の自分へ

ごめんなさい。あなたがくれたこの「みらいへのやくそく」は、まだ果たせていません。しかし、10年後、あなたは日本代表として地球の反対側にある国を訪れ、たくさんのことを学び、感じ、そして自分の考え方を見つめ直したところです。今、世界中の様々な場所で暮らす人々に自分の足で医薬品を届け、「ありがとう」と言われる目標に向けて歩み始めたところです。見ていてください。次世代の日本を担う一人として、きっとこの社会を曇り空から青空へと変えてみせます。



UASDでの昼食会



UASD学生との交流の様子



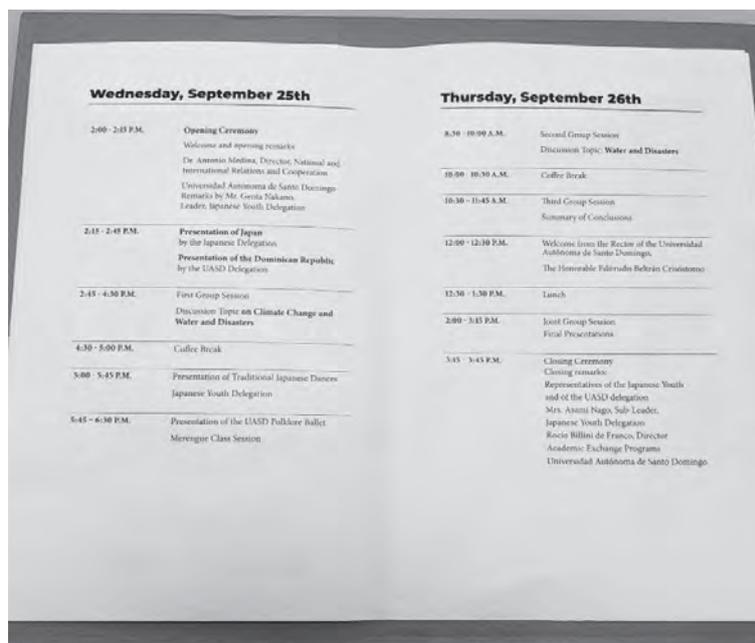
4か国の代表青年と（招へい青年団歓送会にて）

ディスカッション成果

2024年度 テーマⅡ：水と防災 ドミニカ共和国派遣

全体成果

日時	9月25日(水)14:45-16:30、9月26日(木)8:30-10:00/10:30-11:45/14:00-15:15
場所	サントドミンゴ自治大学(UASD) 図書館4階、UASD本部棟カンファレンスルーム、食堂
テーマ	テーマ1: Climate Change テーマ2・3: Water and Disasters
参加者	日本青年12名 ドミニカ共和国青年20名
スケジュール	<p>1日目</p> <p>14:00 - 14:15 オープニングセレモニー</p> <p>14:15 - 14:45 日本並びにドミニカ共和国に関するプレゼンテーション</p> <p>14:45 - 16:30 グループセッション①</p> <p>16:30 - 17:00 コーヒーブレイク</p> <p>17:00 - 18:30 よさこいとメレンゲ披露</p> <p>2日目</p> <p>8:30 - 10:00 グループセッション②</p> <p>10:00 - 10:30 コーヒーブレイク</p> <p>10:30 - 11:45 グループセッション③</p> <p>12:00 - 12:30 アントニオ・メディナ国際関係・交流部長によるウェルカムスピーチ</p> <p>12:30 - 13:30 昼食</p> <p>14:00 - 15:10 グループセッションごとの成果発表</p> <p>15:10 - 15:15 クロージングセレモニー</p>



テーマ：気候変動、水と防災

トピック

気候変動が日常生活に与える影響について

参加者

蘆田 稜
大野 雛子
ドミニカ共和国青年4名

成果

1. ドミニカ共和国における気候変動の現状

- ハリケーンや雨量が増えている。
- 同時多発的にハリケーンが発生することが増えた。
- ここ数年COE(Centro de Operaciones de Emergencias: 緊急事態センター)によって警戒情報が発信されるようになった。
- 気温が今までよりも高く感じられる。
- 気温が上昇したためエアコンをつけたいが、電力供給量が足りておらず、一日に何度も停電することもある。
- ゴミがたくさん道端に放置されることで、排水口が詰まり、洪水が悪化している。
- ゴミをしっかりと分別したり、処理したりするリテラシーを持ち合わせていない。

2. 日本における気候変動の現状

- 夏場の気温が高い。
- 日本は発展している印象があるかもしれないが、近年は気温の上昇により、電力の供給に対して需要が多くなっているのか、政府発信で節電を求められることも増えた。
- お年寄りが多く、夏場にエアコンをつけずに亡くなる方がいるというニュースを耳にする。
- 台風や気温上昇の影響を受けて、不作となった野菜の価格が高騰することもある。
- 台風の発生数が増えた。
- 台風の勢力が強くなり、毎年どこかが被災している。
- 日本においては警戒情報や緊急地震速報などの情報は迅速に国民に伝えられている。
- 高齢者が多いことから、最新のシステムの導入や情報伝達に遅れが生じることも多い。

3. 現状を踏まえた意見交換の内容

- ドミニカ共和国においては技術的な遅れから防災が進まない点もあり、技術の開発や支援が必要。
- Adaptation(適応)とmitigation(緩和)の違いについて、Adaptationを通じて新たな取り組みを行い続けることで、Mitigationに繋がっていくのではないかと。違いというよりは、段階だと考えている。

4. 発表内容

- 気候変動が私たちの生活に直接与える影響をテーマに設定。
- 課題として、食に関わる消費者物価の高騰、不作による食料不足、電気代の高騰、熱中症などがあげられる。
- 解決策として、水浄化・再利用の技術を活用した災害時の水不足対策およびレジリエンス強化、リサイクルによるゴミの減少や洪水の抑制、森林再生による災害の抑制や作物生産の活性化などがあげられた。



気候変動が日常生活に与える影響に関するディスカッション — 共通点と相違点から考えたこと —

蘆田 稜

気候変動及び水と防災について多様な側面から幅広く話し合い、共通点と相違点を見出すことができた点で、意義深いディスカッションだったと感じる。まず、共通点についていえば、例えばどちらの国においても、おそらくは気候変動の影響で、災害や海面上昇等の現象が起こっていることが共有出来た。他にも、電力料金がそもそも高いが、その代替となる再生可能エネルギーである太陽光発電の設備も一般の人にとっては高価で導入が難しいことから、電力を消費する空調などの適応の意味でも再生可能エネルギーの導入による緩和の意味でも気候変動対策にはジレンマが生じていることが理解できた。少なくともそれら共通している部分では、ともに解決策を見出していけるようになれば良いと思った。それは、今回は専門性の違いや、私自身については、そこにうまくつなげるような問いを立てることができなかったことなどから、なかなかかなわなかったが、改めてその重要性和トレーニングを行いたいと考えるきっかけとなった。

逆に相違点としては、例えば、感染症の問題の深刻さや、人々の防災への向き合い方の文化的な違いが浮き彫りになった。何が現時点、各現在位置で最適解であるのか、専門家でない私たちが答えを出すことは難しいのかもしれないが、それでもアイデアとして適宜それぞれに局所解を探し、考えていくことが重要なのだろうと感じた。そして、そのプロセスは単独に行われるのではなく、議論を通してお互いから学ぶ姿勢を持つことでより豊かなものになるのだろうと感じた議論だった。例えば、サントドミンゴには実際緑ある公園が多くあり、都市緑化に関しては日本でもまだまだ考える余地がある部分であろうし、水問題の観点では、水の浄化はドミニカ共和国側にとって課題のようであった。そういったフラットな学び合いができる関係性を今後も築きたいと感じた。

また、それら以外では、専門性が異なる人が集うことによって、多様な観点が場に提供され、私たちもまたその一部であったことはとてもよい経験であった。もちろん必ずしも議論テーマにおける専門家ではないが、それでも、日々生き、学んでいる中でそれぞれが各々の観点から考えを持っていて、それが新たなアイデアや解決策につながっていく可能性もあると感じることができた。

以上のように、この議論ではテーマについて様々な観点を共有し、かつ、そういった議論を行う意義を確認できたと思う。

テーマ：気候変動、水と防災

トピック

特になし

参加者

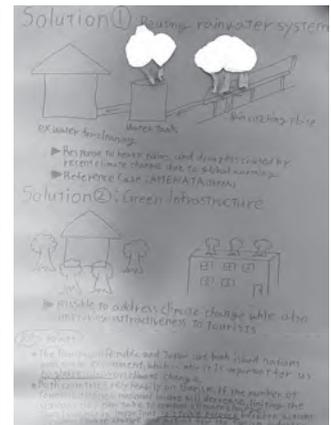
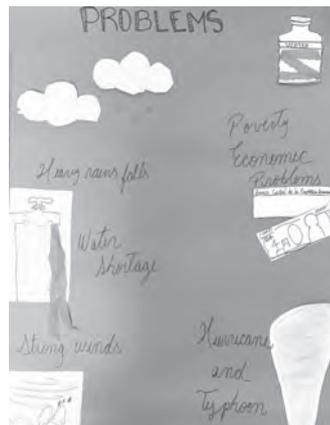
澤本有咲
 阪口友貴
 ドミニカ共和国青年4名

成果

ドミニカ共和国と日本は、気候変動による共通の課題に直面している。グループワークでは、両国の課題を整理し、その解決策を検討した。ドミニカ共和国では、排水設備の不備が感染症の流行を招き、加えて、豪雨による川の水位上昇や水不足、農作物の損失が深刻化している。一方、日本でも台風の威力増加や離島での水不足、豪雨による地すべりなどが発生しており、観光業や農業への影響が懸念されている。これらの課題に対し、水の再利用システムやグリーンインフラの導入が効果的であると考えた。特に、日本の五島列島で実施されている「雨畑」の仕組みを応用することで、安定的な水資源の確保が期待できると考えた。島国として類似の環境を持つ両国が知識を共有し、気候変動対策と両国が力を入れている観光業を両立させることが持続可能な社会の構築に繋がるとの結論を得た。

1. ドミニカ共和国における気候変動の現状

- 観光経済への影響。
- 排水設備が不十分であることが蚊の大量発生に繋がり、それらが運ぶ病気が流行している。
- 豪雨等により、急速に川の水位が上昇することがある。
- 貧困による経済問題。
- ハリケーンの威力が強まっている。
- 水不足。
- 豪雨。
- 農作物の損失。



2. 日本における気候変動の現状

- 観光経済への影響。
- 豪雨等により、急速に川の水位が上昇することがある。
- 台風の威力が強まっている。
- 離島における水不足。
- 豪雨。
- 地すべり。
- 農作物の損失。



3. 解決策

①水の再利用を行うシステム

昨今の気候変動により、豪雨や干ばつの被害が発生している。日本の長崎県五島列島で行われている「雨畑」の様なシステムを構築することで、安定的に水の再利用を行うことが出来る。

②グリーンインフラ

気候変動への対応と観光客に対する魅力向上の両立が可能。

4. 学び

- 日本とドミニカ共和国は共に似た環境を持つ島国であり、気候変動に関するアイデアを共有し合う事が重要であると考えられる。
- 観光業に力を入れている両国において、観光客が減ると国としての収入が減り、収入が減ってしまうと気候変動に対して出来る対策も限られる為、気候変動に対する対応と観光客に対する魅力向上の両立が重要。

新たな気づき

澤本 有咲

「水と防災」をテーマとして今回訪れたドミニカ共和国では、2日間にわたりサントドミンゴ自治大学の学生らとテーマに沿ったディスカッションが行われた。私自身、派遣国でのディスカッションだけでなく準備期間にあたる自主研修期間中においても、新たな気づきを得ることができた。

私たちのグループは、渡航前の自主研修期間中からディスカッションに向けた準備を進めてきた。まず、研修中に活用できるスライドを作成するために、オンライン上で話し合いの場を設けた。お互いに社会人ということもあり、各々の専門分野を通じての考えをグループ内で共有することにした。オンライン上では、主に台風や豪雨における日本への被害やリスク管理、対策について重点を置き、話し合った。これまで、地震や津波に関する防災に興味を持ち、高校時代は文化祭を通じて避難袋作成、社会人になってからは災害救護を通じて防災活動を続けてきたため、水害時の防災対策についても経験を活かした避難訓練対策などを話し合った。また、同じグループの日本青年からは、グリーンインフラと呼ばれる自然の機能や仕組みを活かした都市部の治水対策についての話があった。私には馴染みがない分野だったため、普段とは違った視点からテーマに関する知識を深めることができた。

派遣国でのディスカッションでは、日本とドミニカ共和国における災害について意見を出し合った。そのなかで現地の学生らが、ハリケーン接近後に起きる衛生問題について懸念していたことが印象的だった。ドミニカ共和国では、ゴミの分別や収集の管理が行き届いておらず、廃棄物投棄による公衆衛生が問題となっている。さらに、ハリケーンや豪雨で降り注いだ大量の雨水が町中に投棄されているタイヤに溜まり、デング熱を引き起こす蚊が大量発生するのだという。私自身、派遣国活動中に訪れた郊外にてゴミの散乱を目の当たりにしていたため、ドミニカ共和国が抱える問題点について身をもって感じる事ができた。

このディスカッションを通じて得た学びを活かし、今後は水害時における防災対策にも目を向けた活動を行っていききたい。



テーマ：気候変動、水と防災

トピック

気候変動による国への影響と、国際協調の重要性

参加者

大土呂 碧
二宮 郁己
原田 桃子
ドミニカ共和国青年3名

成果

1. ドミニカ共和国での現状

- 気候変動により、国の主要産業である観光業が打撃を受けている。ハリケーンや大雨といった水に関する災害の規模・頻度が増しており、災害時は観光客の国内への呼び込みが難しくなるとともに、リゾート地としての優れた景観を失う。
- 農業も、気候変動に伴う異常気象による悪影響を被っている。
- 国内の豊富な資源を活用するための技術が不足している。例えば、ドミニカ共和国は熱帯地域であるため、一年を通して日照時間が長い一方、その太陽光を効率的に発電に利用する技術が確立していない。
- 貧困層の経済的困窮度は深刻であり、たとえ住む場所が災害のリスクにさらされていても、移住をすることができない。
- 建物を建てる際の建築安全基準法がない。
- 汚染された水のある場所に発生する蚊から生じるデング熱が問題となっている。デング熱発症者数は、年々増加している。
- 天気予報が不確実である。その理由は二つ考えられる。一つ目に、国営の雨雲レーダーは現在一つしかないなど、国内での気象観測・分析システムが整っていない点が考えられる。二つ目に、カリブ海地域の天気は急に変わりやすいため、予測が難しい点が考えられる。国民の多くは、天気予報の情報を信頼していないため、普段は予報の確認すらしない。大規模な悪天候の予報が出た際は、インスタグラムなどのSNSから情報を入手する。

2. 日本での現状

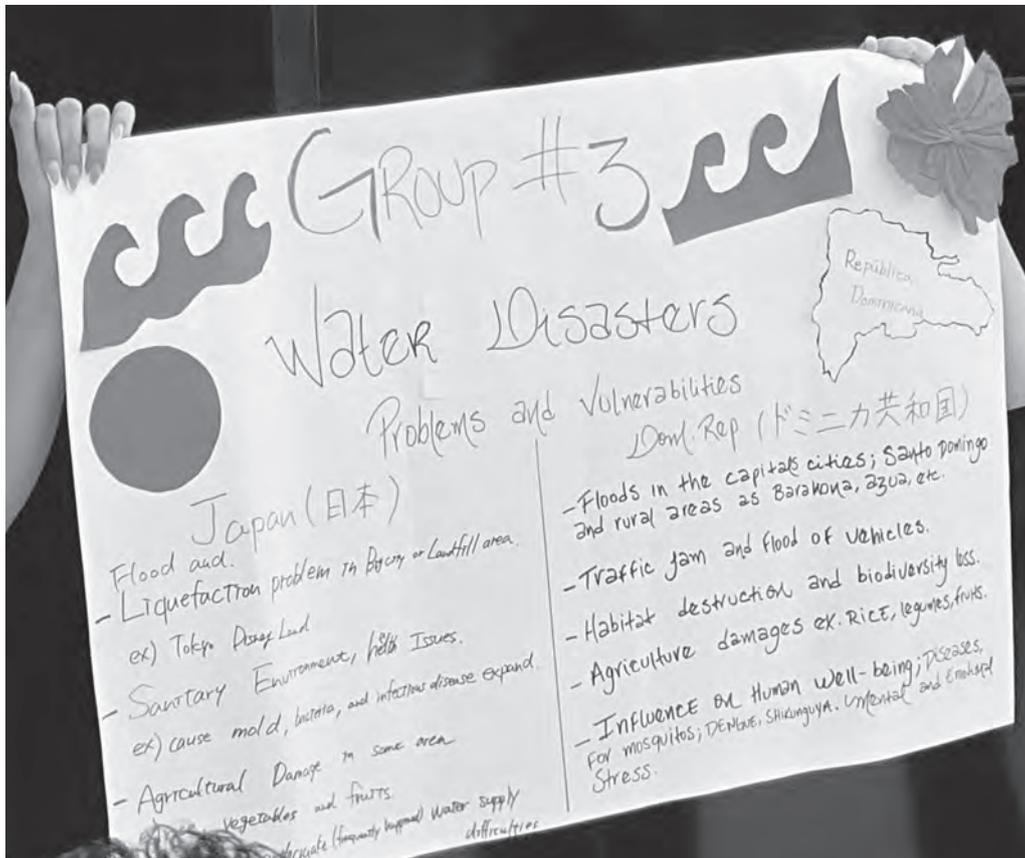
- 高齢化社会の加速により、災害時の救助・医療支援の必要性が増している。特に過疎地域では、住民同士の共助が不可欠であると同時に、非常に困難である。
- 食品の多くを輸入に頼っていることに加え、国内の食料生産地は特定の地域に偏っている。そのため、災害により輸送手段が断たれた場合、食糧確保が難しいと思われる地域が多く存在する。
- 気温上昇や豪雨により、夏野菜や米の収穫量が減少している。
- 環境に負荷をかけない発電方法の普及が難航している。太陽光・風力といった自然環境を利用する発電は、四季のある日本での持続的運用・活用が難しい。
- 社会の発展により、職業の選択肢は増えた一方、個々人に対する社会的な重圧も同時に増え、深刻なストレスを抱える社会人や、将来に希望を見出せない若者が多い。
- 災害からの復旧に関して、技術面はかなり発展したが、福祉面には課題が残る。避難所における女性・高齢者・子ども・外国人といった、被害を受けやすい立場の人々の生活の質にはあらゆる問題が依然として存在する。

3. 二国の相違点・共通点

「ドミニカ共和国には資源はあるが、技術がない。日本には技術はあるが、資源がない。」

ディスカッション中に、上記の意見が何度も上がった。すなわち、豊かな自然を有するドミニカ共和国は、それを活かした観光業による国の収入・知名度の向上や、国内での食糧確保を実現している一方で、高い技術が普及していないため、気象情報の取得・分析やインフラの整備、災害による被害を抑えるシステムの構築が不足している。対照的に、技術を有する日本は、最先端の製品を生み出すことによる国の収入・知名度の向上や、災害に強いまちづくりを技術面で実現している一方で、国内の食糧や発電燃料の不足は深刻である。これらの点において、互いの状況は根本的に異なっ

いる。しかし視点を変えると、「自国のみで、気候変動に直面する現状に対応することは難しい」という共通点がある。実際に、ドミニカ共和国は、近隣国であるアメリカ合衆国からの協力や、JICA等他国の機関の技術支援を受けており、日本は他国からの輸入がなければ、国民生活は成り立たない。ディスカッション全体を通して、ドミニカ共和国と日本の二国間のみならず、世界各国は互いに相補的な存在なのだ、国際協調の重要性を学んだ。



サントドミンゴ自治大学学生とのディスカッション感想

原田 桃子

今回のディスカッションでは、気候変動、水と防災について二日間に分けて幅広いテーマで話し合うことができた。それぞれの国における課題や問題点を改めて議論を通してあげることで、同じ島国としてより良い課題解決に何が求められるのかを考え比較をすることができた。

水問題における課題として日本とドミニカ共和国で共通することは、洪水・都市における液状化・災害発生時における衛生環境の整備がまだまだ不足しているという点だ。一方、気候変動による問題は、一定のエリアにおいて農作物が不作に陥ったり、湿度が高くカビやウイルスが発生し容易に病気が蔓延しやすいという点だ。ただドミニカ共和国では、蚊の媒介が何よりも危険だと強く明言していた。渡航前から、外務省の出す安全情報サイトにも虫よけなどの対策の重要性が記載されていたが、現地の学生一人一人に話を伺っても皆一様にならない意見であること、家族が罹患して辛かったなどといった声を聞くと、より怖さを感じた。

特に印象的だったことは、ドミニカ共和国の学生が、自国が誇る二大産業である農業と観光業のいずれもが気候変動に対して脆弱性が高く、国としてだけでなく、一国民として危機感を感じていたことだ。今回の参加学生の中には、サントドミンゴ市内に住む学生だけでなく、地方出身の学生もいた。観光、農業といった仕事で生計を立てている家計も多い地方では、気候変動による影響をさらに受けやすいと話していた。日本も農業や観光への比重が高いわけではないが、都市部集中型のオフィスは、都市直下型地震などが発生した際、多くの企業のビジネスがすべて止まることが想像されるため、BCP策定や被害を最小限にするための防災地下神殿(首都圏外郭放水路)が防災対策として設置されていることを話すと、ドミニカ共和国にもあれば良いのではないかと話が盛り上がった。

ドミニカ共和国が抱えるもう一つの課題として、渋滞についての議論も話題に上った。日常的に渋滞に慣れていても、避難するに当たり、一瞬の判断が生死に関わるタイミングであった場合、通常以上の混乱を招くことが想像できる。それでもなぜ車が渋滞しているのか、具体的な解決策には今回の時間ではたどり着くことはできなかった。同じ島国としての共通点・課題が重なる一方で、考え方や課題解決の仕方が異なることでより議論が盛り上がり、深まったと感じた。



テーマ：気候変動、水と防災

トピック

洪水による健康面、産業面、経済面での問題とそれにどう
適応・緩和するか

参加者

角田 渉
森山 倫
張 美帆
ドミニカ共和国青年3名

成果

1. ドミニカ共和国での現状

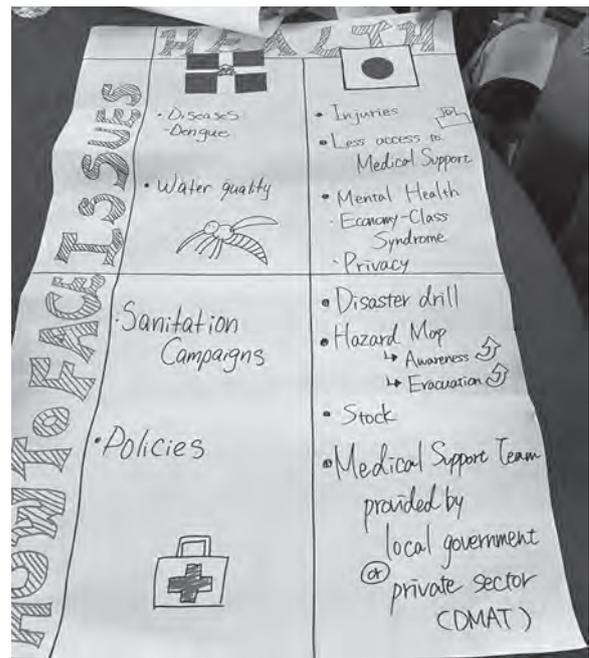
- 健康面では蚊が媒介するデング熱などの感染症、水質の悪化などが問題であり、それに対して衛生キャンペーンを行ったり、政策を改善したりする必要がある。
- 産業面では農業への被害、ビーチなど観光資源の汚染による観光業への影響が考えられる。それに対して、河川領域の地域基盤で連携強化を図り、治水を行う必要がある。
- 経済面では農業分野でのロス、インフラへのダメージ、公共医療サービスのコスト増が考えられる。それに対して災害リスク減少のための計画、保険と財政システムの強化、教育とコミュニティ強化の必要がある。

2. 日本での現状

- 健康面では医療支援の不足、避難後のメンタルヘルスの悪化、エコノミークラス症候群などの二次的な健康被害、プライバシー保護の問題などもある。それに対して、より綿密な避難訓練の実施、ハザードマップの普及、避難所での貯蔵物の見直し、地方自治体や民間による医療支援チームの提供などによって対応する必要がある。
- 産業面ではガスや電気、水やインターネットへのアクセスが困難になること、また農業・漁業・観光業への影響が考えられる。対応策としては、よりレジリエンスを持ったインフラ開発、及び他地域との協同(電気のシェアリングシステム作りなど)が必要である。
- 経済面では地域コミュニティへのダメージ(建造物・建築物、公共施設、交通機関、物流へのダメージ)に加えて、財政面でのロスが考えられる。それに対して、洪水に耐える建築、計画運休、緊急予算・基金の計画が必要である。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

- ドミニカ共和国では観光業が主要産業のひとつなので、ハリケーン被害や景観への被害に対応する必要性が日本と比較して相対的に高いということを学んだ。
- 現在日本で行われている策が不十分というよりは(新しい策を考えるとというよりは)、今ある策をより普及させていく、徹底させていくことが大事なのではないかと学んだ。
- 日本もドミニカ共和国も同じ島国であるため、気候変動という課題に対して似たような問題を持っていることを学んだ。また他の国々も含めてより連携を深めていく必要性を強く感じた。



相手国のニーズを汲んだ支援

角田 渉

今回、二日間にわたって厳しい選考を通過したサントドミンゴ自治大学(UASD)の優秀な学生たちと、水と防災をテーマにディスカッションを行った。日本の学校教育で一般的に見られるディスカッションとは異なり、今回はポスター作成とプレゼンという形式的なゴールだけが示され、今まで経験してきた丁寧なリードがないスタイルに戸惑いを覚えた。しかし、私が戸惑っている間に、素早く課題を見つけ出し、順序立てて議論を進めてくれた他の日本側の団員たち、そして説明内容が理解できないと伝えるとノートにわかりやすく図解してくれたUASDの学生のおかげで、実りの多いディスカッションとなり、テーマを超えた学びを得ることができた。

私たちのグループでは、災害の影響を健康面・産業面・経済面の3つに分け、日本・ドミニカ共和国での現状を比較するという6次元的な議論が展開された。同じ水害への対策であっても、国が異なるとアプローチが大きく異なることに気づかされた。印象的だったのは、「水害による産業へのダメージで特に影響を受けるのは何か?」という議題で、日本・ドミニカ共和国で大きく異なる答えが出た点である。水・電気・ガスといったインフラへのダメージは共通していたが、次に挙げたのが、日本側は工業や製造業だったのに対し、ドミニカ共和国では農業と観光業だった。詳細を聞くと、ハリケーンなどで畑が水没し、ビーチに漂流物が溢れて封鎖され、収穫量や観光客が減少し収入減に直結するのだという。

一見同じ島国であっても、国や経済構成、文化が異なると抱える問題も180°異なることを学んだ。以前、日本のある慈善団体が海外の被災地に折り鶴を大量に送った際、現地では紙くず同然に扱われ、最終的に処分されてしまったという話を見聞きした。このように異なる価値観が共存する国際社会では、自国の価値観を押し付けず、平時から常に相手のニーズや最も必要とするものを第一に考える習慣が、防災支援の国際的な取り組みでは不可欠であることを実感させられる機会となった。



テーマ：気候変動、水と防災

トピック

気候変動による影響と対策

参加者

石黒 桃子
相原 侑汰
ドミニカ共和国青年 4名

成果

1. 両国における気候変動による影響

気候変動対策の比較を行う前に、日本及びドミニカ共和国それぞれにおける気候変動による影響について共有した。以下にまとめる。

ドミニカ共和国での影響

- 海面上昇 (Las Terrenas, Samaná)
- 洪水が増加
- 気温上昇
- 渇水
- 食料不安

日本での影響

- 特定の島における海面上昇
- 洪水の頻度増加による米不足
- 気温と湿度の上昇
- 土砂崩れの頻度高まる
- 暖冬
- 積雪量増加

2. 両国における気候変動対策

ドミニカ共和国の気候変動対策として、以下の4つのトピックをピックアップした。

1. 再生可能エネルギー：ドミニカ共和国有数のモンテプラタ太陽光発電所をピックアップし、太陽光発電の取り組みについて紹介
2. 教育プログラム：サントドミンゴ自治大学(UASD)にて行われている、気候変動に特化した短期集中プログラムを紹介
3. 森林再生プロジェクト：Quisqueya Verdeを事例に、植林活動やそれによって生まれる雇用について紹介
4. 環境と適応：Plenitude Foundationを事例に、非営利団体の取り組みについて紹介

日本の気候変動対策として、以下の4つのトピックをピックアップした。

1. クールビズ：過度な冷房に頼らず様々な工夫をして夏を快適に過ごすライフスタイル。夏場にジャケットやネクタイは着ないなど、服装の軽装化などをはじめとした取り組みを紹介
2. 屋外スポーツにおける工夫：熱中症特別警戒アラート発令の際に活動の中止などの取り組みを紹介
3. 太陽光パネル：家庭用太陽光パネル設置の義務化や補助金制度を紹介
4. 霞堤：洪水対策の1つとして、堤防の一種を紹介

同じ島国でも認識の違い

石黒 桃子

今回、私たちは9月25日から26日にかけてサントドミンゴ自治大学(以下UASD)で気候変動と水と防災のディスカッションを行なった。ディスカッションをするにあたって私は、日本で実感した気候変動の影響をメモしたり、気候変動による問題や日本の防災対策のリサーチをしてから臨んだ。

初日は各国の気候変動の現状について学生たちと意見交換を行なった。同じ島嶼国ということもあり、気候変動の影響についてはハリケーンや台風などによる豪雨や洪水、土砂災害、極端な気候による作物の不作など様々な影響が出るという意見があった。共通の事象はたくさん上がったものの、その内容にはそれぞれ異なる点が見られ、日本の現状を共有した際に驚かれたこともあった。その一つが気温上昇の実態である。昨今日本の各地域で観測史上最も暑い夏といわれることが多くなっており、今年東京では6月から8月の猛暑日数が19日に上ったこと、最も猛暑日数が多かった大分県では41日に上ったことを共有した際に、彼らが思っていた以上に日本は暑かったのかとても驚かれ、問題視された。熱帯地域の学生に驚かれてしまう日本の夏の実態の共有によって気候変動の深刻さを再度実感するディスカッションとなった。

2日目は水と防災をテーマとしたディスカッションを行なった。ドミニカ共和国を訪問した際、排水設備の不十分さを各地域で目撃し、十分な排水ができないことにより水たまりが発生し、そこから蚊が発生することでデング熱が蔓延することを知った。このことを議論に挙げたが、排水設備が不十分だからではなく、ゴミが溜まってしまっているから排水できていないだけだ、と説明されたことが印象的であった。確かに都市から少し離れると道路の脇には数多くのゴミがそのまま捨ててあったが、それを解消すると同時に排水設備そのものを整備することが重要だと感じていた。この認識のズレに排水設備が行き届くまでにまだ時間がかかるのではないかと察した。

また、排水機能を改善するためのゴミ問題を解決する手段として3Rが提唱されたが、UASDの学生は3Rが何かを覚えていなかったことに驚いた。日本では義務教育課程から3Rに触れているが、ドミニカ共和国では大学生でも3Rを覚えていないという実態はこの国のゴミの分別意識の低さやゴミ問題に関するリテラシーの不十分さを感じた。

同じ島嶼国で実感している問題は共通していても、その対処法を探っていく中でリテラシーや意識をはじめとするさらに数多くの問題を孕んでいる。これが気候変動や防災の対策が各国で差がついてしまう原因なのではないかと改めて考えるディスカッションとなり、非常に視野が広がる機会となった。



